

特別
講演

220億円の義援金が集まった台湾

小説家・エッセイスト 木下 諄一

皆さんこんにちは、本日の特別講演の講師を務めさせていただきます、木下諄一と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。

先ほど斉藤専務理事から紹介がありましたように、わたしは今、台湾に住んでおります。そして昨日の午後こちらに入りました。寒いです。非常に寒いです。飛行機でわずか数時間の違いですけど、台湾とは全然違います。ちなみに、昨日、わたしが来る前の台湾の温度は29度。そして先週は立冬でしたけれど、連日30度を超えていました。ですから昨日の晩こちらに入ったときは震えておりました。

さて、そんな話は別にして、今日の特別講演のテーマは「200億円の義援金が集まった台湾」。ということで、皆さんのご専門であります測量関係とはちょっと内容が違います。ただ、会場が仙台、東日本大震災の被災地ということで、興味があるという方も少なからずおられると思いますので、このテーマでお話させていただきたいと思います。

それでは早速なんですが、皆さんは台湾について、どんなイメージを持っておられるでしょうか？ 最近では台湾もかなりメジャーになりました。しかし、わたしが初めて台湾に行った1980年、今から37年前ですけど、その時は台湾といってもピンとこない人がほとんどでした。そして知っているものといえばバナナぐらいで、香港との区別さえ分からないという人が大勢いました。

どうでしょうか？ 皆さん、この中で、台湾

に行ったことがあるという方はおられますか？

ちょっと手を挙げてもらえますか？ はい、ありがとうございます。ポツポツという感じですね。それでも、こういう光景を見ると、わたしなんかは時代が変わったなあと思ったりします。昔は、こういうふうには「台湾へ行ったことがありますか？」と聞いて、今みたいに堂々と手を挙げるというのはかなり勇気がいることでした。というのも当時、日本から台湾へ行く旅行者というのは年齢分布と男女比率の方面でかなりの特徴がありました。つまり、80%～90%ぐらいが中年の男性だったということです。そして彼らの旅行の目的はというと、1番がグルメで、2番がナイトライフ。

ところが今、台湾は若い女性やファミリーにたいへん人気の観光地に変わっています。本当に何がどうなるかわかりません。さらに2015年、この年は、年末年始を海外で過ごす日本人の渡航先として台湾がハワイを抜いて1位になりました。それから修学旅行の渡航先、これも台湾が1位になりました。このように以前では信じられなかったことが次々と起きています。そして、その理由の一つが2011年の東日本大震災の際に台湾が寄付した多額の義援金だと思います。

東日本大震災のとき、台湾が送った義援金は200億円以上です。台湾の人口が大体2,300万人ぐらいですから、これを単純に数字で割ると、一人当たり日本円で約800円。大人も子供も老人も、すべての台湾人が800円ずつを出したという計算です。簡単なことではないというか、驚くべきことだと思います。そして、当時、

台湾がこんなにたくさんの義援金をくれるということはおそらく、誰一人想像していなかったのではないかと思います。

わたしもわかりませんでした。全然、思いもつかなかったです。そして被災地の皆さんもおそらくこんなことは想像してなかったと思います。ですから、台湾と聞いても、もしかしたら「台湾ってどこ?」、「どうして台湾が?」、はっきり言ってその程度のイメージしかなかったかもしれません。というわけで、今日は当時のこと、台湾で義援金がどうやって集まったのかについて、もう少し掘り下げてお話ししたいと思います。

2013年東日本大震災が発生してから2年後のことですが、わたしは1冊の本の執筆をはじめました。それが「アリガト謝謝」です。写真がありますのでご覧ください。この本です。



どうしてわたしがこの本を書こうと思ったのか、そのきっかけは、友達から「被災地の人が台湾のことを知りたがっている」と聞いたからです。震災後に台湾からたくさんの義援金が届いたということで、一度台湾へ行ってどんなところか見てみたいという人。または修学旅行で台湾に行く自分の子供に「しっかり台湾を見て来い」と送り出す親御さんが被災地で増えている、そんな話を聞いたのです。

このときわたしは「被災地の人達が台湾のことを知りたがっている」という言葉が、なぜか

気になりました。おそらくその中に「台湾」という言葉が入っていたからだと思います。わたし以外でも台湾に住んでいる日本人というのは、日本で台湾がニュースになって報道されたり、話題になったりすると無意識のうちにいいですか、自然に反応してしまうことが往々にしてあります。そのときのわたしもちょうど、そんな感じでした。ですから「知りたがっている」、「台湾のことを」、スタートはここからです。そして瞬間的に「これは何か出来るかもしれない」と思いました。

さらに、もう少し具体的に何が出来るかを考えたときに、わたしは30年近くずっと台湾に住んでいますし、わたしの仕事はものを書くことです。ですから、それだったら被災地と台湾の物語を書いて、それを日本で出版して、そして被災地の人たちに読んでもらおう。そして台湾を知ってもらおう。そんなことができたらいいなあなんて漠然と思ったわけです。

ただ、少し冷静になってみると、これは難しいかもしれないと思い直しました。どうしてかという、被災地というテーマは本当に敏感なテーマです。被災された方でないと本当にその気持ちはわからないだろうし、今でも心に痛みを負っている人たちが大勢いるわけです。そんな中で、わたしは被災地の人間ではありませんし、特に被災地と深い縁があるわけでもない。そんな人間が、このテーマではたして物語を書くことが許されるのだろうかと思ったら、その気持ちがすうっと消えていったのです。

ただ、そのときは消えていったのですが、おそらく「被災地の人達が台湾の事を知りたがっている」という言葉は潜在意識の中にずっと残っていたのだと思います。ある朝起きたとき、ふと思いました。台湾で義援金が集まる様子を現地視点で描いたらどうだろう。これだったら被災地の人も皆さんも知りたいのではないかと。

それに彼らの心の痛みにも触れることはないのではないか、そんなふうに思ったわけです。さらに、できるだけ愛だとか絆だとかそういうことは排除して、もう純粋にお金はどうやって集まったのかという、そのところだけにスポットを当てて、それを伝えようと考えました。こうやって実際に作品の制作がスタートしました。

実際の作業については、初めはプロット、物語の大枠を作るのですが、それが終わった後で今度は資料を収集します。これに当たっては、わたしが住んでいたところから歩いて2、3分のところに台北市立図書館があったので、そこへ行って、どんなことがあったのか当時の新聞を一つ一つ片っ端からチェックしようと思いました。ところが、すでに震災から2年半ぐらい経っていましたので、たくさんの新聞が廃棄されていました。唯一、「自由時報」という新聞、これは台湾で最大発行部数の新聞なんです、それだけがちゃんとした形で残っていました。わたしはこの「自由時報」の記事を2011年の3月11日から、ずっと調べました。そして、必要だと思ったものをコピーしていきました。もちろん「自由時報」1社だけでは足りないと思ったので、その後、インターネットでも調べました。

インターネットでまず何が一番調べたかったというと、募金をした人達についてです。どんな人達がどんな方法で、どこを窓口にして募金をしたのか、それを知りたいと思いました。そし

て最初に調べたのが外交部、日本でいうところの外務省のサイトでした。ここではいろいろなことがわかりました。まず、こちらをご覧ください。

外交部が調べた義援金の、募金の状況です。2013年6月30日ですから、震災から2年少し後のものです。合計で68億5419万元。当時はかなりの円高だったのでこれに3.1か3.2ぐらいをかけてもらうと日本円になりますが、若干低めに見積もって3をかけたとしても200億円をちょっと超えるぐらいの計算になります。

この68億5419万元の中で政府機関が集めたお金をみてもらうと、これが約7億7千万元。これを全体の比率にすると10%ちょっとです。これは何を意味するかというと全体の8割から9割ぐらいは民間が募金をしたということです。

政府がお金を出す場合、何らかの目的があって海外に投資する、要はお金をばらまくような話をたまに聞きますが、このときの台湾の義援金については、そういう類のお金ではなく、民間が集めたお金でした。いってみれば、国民の一人一人が自分の給料やお小遣いの中から自分の意思で出したお金です。このところがわたしは本当にすごいと思いました。そして、このときの様子を、写真を用意しましたので、ご覧いただきたいと思います。

これは高校生が募金をしています。みんな自分で作った募金箱を持って、いろいろなところへ行っています。こうして少しずつお金を集めました。

311義援金の募金状況 (2013年6月30日 台湾外交部調べ)

政府機関 (外交部ほか15か所)	7億6975万元
慈善団体経由 (赤十字、慈濟など10か所)	54億3098万元
国内を通さず (長栄發氏、交流協会など)	6億5346万元
合計	68億5419万元

義援金の募金活動の様子



学校内での募金活動



これは大学です。大学の場合は、ほとんどの大学が日本語学科が中心となって募金活動を行いました。右側の写真の中の着物を着ている人たち、彼らは日本人ではなくて台湾人です。台湾人が日本を意識してこういうパフォーマンスを行いながら募金をやっていました。

これは役場です。いろいろな役場でも募金が行われましたが、この写真は台湾の東海岸沿いにある小さい村ですが、ここでも住民に対して募金を呼びかけました。そして、わたしがびっくりしたのは、地震が起きた11日は金曜日だったのですが、この募金は14日の月曜日から始まっていることです。スピードがものすごく早いです。その後、火曜日、水曜日あたりから至る所で、募金活動をする団体が出てきます。

役場の場合は住民だけじゃなくて、議会でも積極的にやりました。市長とか市議会の議長とかが中心となって「わたしはいくら出します」といった具合で募金しました。金額も日本円にして何十万円という結構な額をぼんと出すわけです。そうすると、ほかの議員とか省庁の人とかも、「じゃあわたしも、わたしも」ということで、どんどんお金が集まっていきました。

こちらは企業の関係ですけれど、企業も社長がこれだけ出しますってことで、ドーンと出すケースが結構ありました。たとえば100万円とか200万円とか、そういう金額を平気で出していました。



役場や職場でも

もう一つ、よくあったパターンが、公務員や大きな企業の中では従業員が1日分の給料を募金するというやり方です。募金に同意した人は、1日分の給料が天引きされます。従業員の多い企業ではかなりの額になったと思います。

これはテレビのチャリティ番組です。これはかなり威力がありました。スタジオにひな壇があって、そこでコールインによる募金を受け付けます。「いくら募金します」という電話がどんどん入ってくるわけですね。実際の放送では、画面の下に募金した人の名前と金額が流れます。そして、ここに写っている人を見てほしいのですが、左の上の写真で右から二人目、マイクを持って話している人。彼が当時の台湾総統の馬英九です。それで右上の写真、下の二人の男性。左側が当時の台北市長の郝龍斌。右側が行政院長の呉敦義です。そして、その下の写真。一番右にいる人、おかつ頭のこの人はも



う亡くなっちゃたんですけど、台湾ですごく有名なコメディアンの諸葛亮です。左上の写真の、サングラスをかけた人も有名なコメディアンです。これからもわかるように、政界も芸能界もみんながテレビに出て募金を呼びかけました。これは生放送で、しかも震災から1週間以内にやっています。それにしても豪華なメンバーです。日本にしてみると、安倍さんと小池さんと菅さんですか、それと、ビートたけしとか、明石さんとか、みんな一緒の画面に出て「日本を助けるぞ!」とやるわけです。そして、これが一つだけではなくて、わたしの知っているだけでも大きいもので3回ありました。

これは慈善団体です。この青の服に白のズボン、それから白の靴。これが彼らのユニホームですけど、これ、皆さんの中でご覧になったことがある人はいますか？ 彼らは被災地まで直接来て、被災した人たちにお見舞金を手渡しています。金額は家族の人数によって3万円、5万円、7万円です。

この慈善団体、名前は「慈濟」といいます。ここに「親手発放」と書いてありますね。これは中国語で《チン・ショウ・ファー・ファン》と書いて、「必ず自分の手で被災者に直接渡します」という意味です。というのも、義援金というのは、外国なんかで時々、寄付したのはいいけれど、それが全部権力者の手の中に入ってしまって、本当にほしい人に行き届かない、そういうケー

スが多々あるということで、必ず彼らは現地へ行って、現地の人に直接渡すという方法を取っています。

この直接現金を渡すという方法ですが、今回はなかなか許可がおりなくて、何度も政府機関にかけあって、最後にやっと許可が下りました。そのあとでいろいろな場所を借りて、そこでお金を配布しました。その金額は合計で50億円以上。そして、この他にも1億8千万円ぐらいの物資を支給しています。取材のとき、彼らに聞きました。「どうしてみなさんはこんなにたくさんのお金を寄付するのですか?」。そしたら、こういう返事が返ってきました。

「見苦知福」

これを中国語で読むと《チエン・クー・ツー・フー》というんですけど、意味は「他の人が苦しんでいるのを見て、自分が恵まれていることを認識する」ということです。そうすることによって、愛の心で他の人に接することができるというのです。これは元々、仏教の教えらしいのですが、彼らはそれに従って活動しています。ただ、この団体は宗教団体ではなく、慈善団体です。ですから中にはキリスト教の人もあるし、カトリックの人もあります。

それから彼らはこんなことも言っていました。「災害というものはいつ、どこで、だれの身に降りかかってくるかわからない。今日はたまたまわたしのところではなかっただけのこと。だから、常に自分のことだと思って、人のことを助けたい」。

このほかにどんなところが募金活動を行ったかという、例えばレストラン。レストランはチャリティメニューを作ります。そしてこのメニューの注文で得た収益をすべて被災地に寄付するというキャンペーンをやります。そうすると、おもしろいことに、お客さんはみんなこのメニューを頼みます。一つだけではなく、二つ目を頼み



ます。さらにお土産として三つ目も頼みます。

ほかにもわたしが取材した中で、「3日間の売上げを全部日本に寄付します」と告知したパン屋さんがありました。そうすると、お客さんはみんないつもよりたくさん買ってくれました。中にはインターネットなどでこのことを知って、すごく遠い所から来た人もいました。

ほかにはチャリティバザーもありました。いろいろなものをバザーの形で売って、それを寄付するというものです。自分のところで収穫した高級フルーツの売上げを全部寄付した農家もありました。

こんなかたちで、至るところで、いろんな人が一斉に募金活動をやっていました。そしてこの間、募金に関する振込みについては、銀行は一切手数料を取りませんでした。「募金をどんどんやってください」。そんなムードが漂っていました。わたしはこれを見ていて、何だか国民的なイベントが行われている、そんな様な感じでした。この間、そこには重苦しい雰囲気は全くなくて、みんなで盛り上がり行くぞという感じ。本の中では「サッカーのスタジアムでウエーブが起こっているようだ」と書いたんですが、まさにそんな感じでした。

話を「アリガト謝辞」に戻します。「アリガト謝辞」は、先ほども言いましたけれど、被災地でどうやって義援金が集まっていったかということを描いた小説です。これが今年3月に出版

されたとき、たくさんのメディアから取材を受けました。こんな感じです。

メディアからは取材でいろいろな質問を受けました。募金について、台湾についてはもちろんですけど、ほかにも、執筆の過程やわたし自身のことについてまで。それで、このとき、すべてのメディアから聞かれた質問が一つあります。何かというと、これです。

どうして台湾で200億円の義援金が集まったのか？ これはもしかしたらメディアだけじゃなくて、被災地の人たちも含めてみんなすごく不思議で、一番知りたいんじゃないかと思います。

ただ、これを説明するのは簡単ではありません。少し時間も必要です。ですから、時間の限られた取材の中では、「もしかしたらうまく伝わらないかもしれないけれど」ということでお話しました。今日は時間もあるので、少し突っ込んでというかも少し細かく、わたしなりの考えをご紹介しますと思います。

まず、「台湾人の持っているやさしさ」です。これは簡単に理解できそうなんですが、なかなかちゃんと伝わりません。というのは「やさしさ」という言葉の定義です。「やさしさ」というのはすごく抽象的です。ですから、わたしのいう台湾人の持っている「やさしさ」と日本人の考える「やさしさ」の間に微妙なズレが生じます。これについては例を挙げながら説明したいと思います。

例えば、わたしの知っている人の中に、スマトラ沖の地震の時、2,000円寄付した女性がいいます。2000円は日本円でだいたい7,000円ぐらいですけど、彼女は普通の公務員で生活が特に裕福だということはありません。スマトラも全然関係ないです。じゃあなんで、寄付したのかと聞いたら、テレビを見たらとてもかわいそうだったからと言いました。

アリガト謝辞メディア報道

- 東京新聞(3/7掲載)
- 共同通信(3/7取材)→(岩手日報、長崎新聞、山陰中央ほか)
- 中日新聞(3/8掲載)
- 日刊SPA(3/11掲載)
- NHK総合「これでわかった！世界のいま」(3/12放送)
- 毎日新聞(3/14掲載)
- 現代ビジネス(3/16掲載)
- 西日本新聞(3/21掲載)
- 小説現代(3/21掲載)
- 日刊ゲンダイ(3/22掲載)
- NHKBS1「国際報道2017」(3/22放送)
- 日本経済新聞(3/25掲載)
- 産経新聞(4/2掲載)
- NHKラジオ第1「マイあさラジオ」(4/4放送)
- 朝日新聞広告(4/14掲載)
- FM-WAVE「JAM The WORLD」(5/22~5/26放送) ほか

そして、「アリガト謝謝」の取材で知り合った一人の女性。彼女は大学院生なんですけど、東日本大震災の義援金の募金に対して3000元、日本円にして1万円ぐらいを寄付しました。わたしは彼女に聞きました。「学生で1万円って、結構大きくないですか?」。すると彼女の答えは「テレビを見ていたら本当にかわいそうだったから」ということです。

この二人に共通しているのは何かというと、「かわいそうだと思った」ということです。でも、かわいそうだと思うだけだったら、日本人も同じだと思います。ただ、その後で、日本人の場合すぐに知らないスマトラの人に1万円とか寄付するのでしょうか?ここのところがちょっと違います。じゃあ、どうしてここが違うのか、わたしなりに考えてみました。

たとえば自分と他の人の間に境界線があるとします。日本人の場合、あまりこの境界線を越えて相手の領域に入っていく人はいません。めんどうくさいし、嫌われるかもしれない。でも、台湾人はそんなことは関係なく、結構、勝手に越えて行きます。台湾人に「台湾人のいいところはどこですか?」という質問をぶつけると、多くの人から「人情味」という答えが返ってきます。日本人の感覚では、いいところが人情味というのはちょっと違和感があるのではないのでしょうか。人情味っていうと、何だか義理人情・浪花節のような感じで、少なくともいいところに分けられるようなものではないと思います。でも、彼らはそれを自分たちのいいところだといいます。じゃあ、彼らのいう人情味とはどういうものか。わたしが台湾で生活していて感じたいくつかのケースをご紹介します。

簡単などころでは、道端で「どどこへ行きたいんですけど」と道を聞いたとき、それほど遠くなければ連れて行ってくれたり、そうでなくてもすごく丁寧に教えてくれたり。それとか、両親が共働きで、子供を幼稚園に預けてるケース

なんかで、幼稚園が終わる時間に親が子供を迎えに行けない。こんなとき子供は夜まで幼稚園に残って親を迎えに来るのを待ってなければいけないんですが、中には子供と同じクラスの友達のお母さんが「じゃあ、わたしが引き取ってあげるから、うちに来なさい」って。このほかにも遠くから友達が遊びに来たら「ホテルなんか泊まらないで、うちに泊まりなさいよ」。これなんかは今でも頻繁にあります。

こういうのがわたしが生活の中で感じる人情味で、台湾人の「やさしさ」の中には日本よりもたくさんこうした要素が入っています。そして、そこには困っている人がいたら放っておけないとか、何とかしなきゃといったところがあって、こういうのが普通に社会のベースに流れています。ただ、当然のことなんですけど、全部の人がこうだというわけではありません。やさしくない人もいます。でも、社会全体を見た場合、こういう流れが出来上がっている。そこが日本と少し違っているのかなあとと思います。

これがまずひとつ。わたしは、台湾人の持っている「やさしさ」というのが200億円の義援金が集まったことと関係していると思います。

さて、こんなふうになると、台湾人はすごくお人よしで、何でもすぐにお金を出すんじゃないかと思ってしまいがちですが、そんなことはなくて、台湾人はお金に対してすごくシビアです。彼らは安く買うためだったらすごくタフな交渉も厭わないし、儲けるためだったら詐欺まがいのことも平気でやります。そして、お金の話をするのが大好きです。ここは日本人と全然違います。

例えば、わたしが引っ越しをしたときのことなんですけど、引っ越しの当日、まだ荷物も運び入れていないときに、近所のおばあさんとかがやってくるわけです。こちらとしては、今後ご近所さんになるわけですから、挨拶でもしようと思って、「すみません。今度引っ越して来ました。木

下と言います。日本人です」というような話をするんですけど、全然聞いていないです。それで何を言うかという、「いくらで借りた」。これに対してまじめに「いくらだよ」というと、「あの大家儲けやがったなあ」。

買い物なんかもそうですね。「こんなの買いました」というと、すぐに「いくら?」と聞かれます。「旅行に行きました」というと、やっぱり「いくら?」です。情報収集というか情報交換というか、彼らにとってはそんなところだろうと思うんですが、とにかくお金に対しては避けることなく非常にダイレクトです。

あとは就職活動の面接で給料の話をするとき、日本だったら会社がだいたい給料を提示してくれますが、台湾ではそんなことはありません。まあ、大手だったら最低の給料提示ぐらいはあるかもしれませんが、それがなくても驚きません。それで、こういう場合、会社側からいくらほしいのか聞いてきます。そこではっきり金額をいわなければいけません。日本人は謙虚な人が多いですから、ちょっと少なめの金額をいう人もいますが、これはよくない。その金額で決まったあと、ずっと上がらないからです。日本だったら毎年ベースアップがあって少しずつ上がっていきますが、台湾では5年、10年と給料が上がらないケースもあります。

じゃあ、上げてもらうためにどうしたらいいかという、会社に直接いわなければいけません。「給料上げてもらえますか」と。そうすると会社はだいたい「だめだ」といいます。上げてくれません。そこで辞表を出すと、その人間が会社にとって必要な人材であれば、そこから給料アップの交渉が始まります。もし必要でなければ、その辞表は受け取られます。最近、テニスの試合とかで審判の判定に不服なとき、「チャレンジ」といって再審査をリクエストすることができますが、あれとよく似た感じです。辞表を受け取られたら、「チャレンジ」失敗です。

わたしの友達の中にも辞表を会社に受け取られてすごく怒っている人がいました。この辞表については、わたし自身も過去に経験があります。当時わたしはある出版社で働いていたんですが、次の仕事が決まったので会社に辞めたいと申しました。そしたらオーナーがこういったんです。「そうそう、ちょうど先週、あなたの給料について話してたところなんだ」。わたしは日本人ですから純粋に次の仕事が決まったので辞めたいと申したつもりでしたが、伝わりませんでした。オーナーのほうは給料の交渉だととらえて、なかなかわたしの意図をわかってくれない。

まあ、こんな感じで台湾ではお金に対してははっきりダイレクトに話をします。そして、使うほうでも日本と考え方がちょっと違います。有名なところでは、台湾は基本的に割り勘という考えがありません。中のよい友達といっしょに食事したり飲んだりしたときは、その時の状況でどちらかがご馳走するというケースが多いです。友達を訪ねて台湾へ遊びに行った日本人がそれを知らずにご馳走になったとき、「すみません。これ」といいながら、半分だけ出そうする人がいますが、これはダメです。向こうは楽しくてご馳走する気であるのに、それをぶち壊すのは失礼ですから。

では、こういうケースではどうするかというと、素直に「どうもごちそうさまでした」といいます。そして「今度日本に来られたらわたしをご馳走します」、これでうまくまとまります。

お金に対して、台湾には面白い言葉があるので、これを紹介します。

「有錢好辦事」

《ヨウ・チエン・ハオ・バン・シー》とって、直訳すると「お金があれば何をするのも非常に便利だ」という意味です。なんかこれだけ聞くと、札束で相手の顔をバンバンとやって、いうことを聞かせるなんてふうにも、よくない意味で

捉えられることもあります。わたしはこの言葉が嫌いではありません。どうしてかという、この言葉にはお金に対する本質のようなものが感じられるからです。そして、こういう言葉が存在する台湾ではみんなお金に対して、正面から真剣に向き合っていると思います。

日本ではどちらかというと「お金の話は止めておきましょう」とか、「お金の話をするとみっともない」とか往々にしてお金の話を避ける傾向にあります。が、台湾ではそれは一切ありません。お金のことをしっかり理解して、必要なときは惜しげもなくぽんと出す。でも、必要でないときは少しも出さない。そんな考えがあります。だから、今回の義援金についても彼らは必要だと認識したのだと思います。お金を送ることがもっとも有意義な方法だ。このような考え方も200億円の義援金が集まったことに、間接的かもしれませんが影響していると思います。

さて、台湾人のお金に対する考え方について、わたしは「アリガト謝謝」の中でこんなふうに書きました。ちょっと読ませていただきます。

『もしかしたら、彼らは日本人よりもずっとお金のことを知っているのかもしれない。お金を稼ぐことの難しさも、それを使って得られる幸せも、いざというときに、お金が発揮する計り知れない力も。だからお金を出すということは、彼らにとって何にもまして心を届けることになるのではないだろうか。愛の心を届けることに』
(アリガト謝謝第一章)

これがわたしの見た、台湾人のお金に対する考え方です。

さて、ここまで200億円の義援金が集まった理由として「台湾人の持っているやさしさ」と「台湾人のお金に対する考え方」を挙げましたが、もしこのふたつだけだったら、今回の200億円の義援金は絶対に集まっていなかったと思いま

す。実はこのほかにもうひとつの大きな要素があります。それが何かというと、被災地が日本だったということです。

今回台湾人があそこまでお金を出した背景には被災地が日本だったということがあります。これは間違いのないと思います。では、どうして被災地が日本だと彼らはお金を出すのか。わたしが考えた理由はこれです。

「台湾人は日本が好き」

こんなふうになると誤解を招くケースがあるので、ちょっと付け加えておきます。それは「好き」という言葉です。これもいろいろな解釈があるのでここを説明しないと間違っているとられます。どういうことかという、**「台湾人は日本が好き」とは**いっていますが、決して盲目的に日本のことを崇拜しているわけではありません。そして、よく日本人の中に「台湾は親日だから」ということをいう人がいます。たしかにこれは間違いではないのですが、もう少し細かく考えたほうが良いと思います。親日の一言で全部をくっってしまうほど、そんなに簡単な構造ではなくて、その中にいくつも複雑な要素が混じっているからです。

例えば、かつての日本の統治時代を知る人たち、今はもう80歳以上の高齢の方たちですが、彼らは日本に対してどこか懐かしいといった感情もあって、だから日本が好きだという人が結構います。彼らは日本人が去ったあと、順法（じゆんぽう）の精神や衛生観念や秩序など、多くのよいものを残して行ってくれたと思っているからです。

しかし、一方で若い人達はどうかというと、こうしたノスタルジックな感情は一切ありません。その代り、日本のアニメとか漫画とか、映画とか、ドラマとかサブカルチャー的なものが物心ついた時からずっとあるわけです。そうすると、これらに対してすごく愛着があって、そこから日本が好きだという感情が出てきます。こ

れもまたひとつの「日本が好き」です。

このほかにも日本製品の品質、クオリティが好きだという人もたくさんいます。日本の品質は信頼できるというわけで、それを証明するかのよう、日本に旅行に来ていろいろな物を山ほど買って帰る台湾人がたくさんいます。

何を買うかという、最近人気があるのは、マイナスイオンのドライヤーとか、ウォシュレットトイレとか。一番顕著なのは薬です。彼らは日本で大量の薬を買って帰ります。アリナミンEXは絶対に買います。こういうふう、日本の品質が好きだというこれも一つの理由です。さらに日本人の誠実さや道徳心に対する尊敬、これもあります。わたしも台湾で日本人だと言うと、「日本人は道徳心があるからね」と言われたことが何度もあります。こうしたものが全部いっしょになって創り出されるカオスな状態。それが「日本が好きだ」という感情であり、「親日」という言葉です。

とはいうものの、先ほどもいいましたが、台湾人は決して日本のことを盲目的に崇拝しているわけではありません。言ってみれば、普通の生活の中で好印象を持っている程度のことです。ですから、何も日本人を特別扱いするとか、そういうことはありません。それに、日本が好きじゃないという人もいます。ということなので、台湾人は親日だからみんな日本が大好きだというステレオタイプ的な見方はしないほうがいいと思います。それでも、それを踏まえたうえで、台湾の社会には一般にいえば「日本が好きだ」という感情がベースに流れています。

そして、この要素に先ほどお話しした「台湾人の持っているやさしさ」と「台湾人のお金に対する考え方」がかわります。これらはいわば、乾燥した枯草のようなものです。そして、そこに「日本を助けたい」という火がついた、その瞬間にその火は驚くほどの勢いでぼわっと燃え広がっていった。これが200億円の義援金です。

今日はメディアの取材のときよりもう少し細かくお話ししましたが、いかがでしょう。何となくイメージはわかっていただけたでしょうか。これがわたしの考える「どうして台湾で200億円の義援金が集まったのか」の理由です。

李登輝さんをご存じでしょうか。李登輝さんは、以前の台湾総統です。まだ、健在です。そして李登輝さんは、本当に日本が大好きで流暢な日本語で話すのですが、この李登輝さんがこんなことを言いました。「東日本大震災で台湾が義援金を送った後、台湾の片思いは終わりました」。

でも、わたしからすると片思いはまだ終わっていません。李登輝さんの言葉の中には大きな希望が入っているのかなという感じがします。というのは、たしかに李登輝さんがおっしゃるように、義援金を送ったあとから民間交流も盛んになったし、これによって日本と台湾の関係はとてよくなりました。でも、双方の渡航者人数を見ると、日本から台湾へは年間だいたい190万人。この数字は、かつては信じられないほど増えています。わたしは1990年前半に台湾観光局の日本向けPR雑誌の編集をやっていて、毎月の渡航者人数をとてよ気にしていたので今も覚えているんですけど、当時の渡航者人数は60万人ちょっと。ですから、そのころと比べて3倍になっているんで、すごく増えたと思います。でも、その一方で台湾から日本に来る人はどのくらいかという480万人です。しかも日本と台湾の場合は人口も全然違います。こう考えてみると、日本と台湾の関係はよくなってはいるけれど、やはり李登輝さんのいうように片思いの時代は終わったとはいえないというのが、わたしの見方です。

それから渡航者数だけでなく、お互いのことをどれだけ知っているか、どれだけ関心があるか、その部分を比べたときにその差はたいへ

ん大きなものがあると思います。台湾人は本当に日本のことをよく知っています。日本のことにものすごく関心があります。だけど残念なことに、日本では台湾のことはあまり知られていません。

わたしとしては、もう少し日本でも台湾のことを知る人が増えて、もう少しその差が縮まればいいかなと、そんなふうに思います。

このことについて、わたしは小説の中で、こんなふうに書きました。こちらをご覧ください。

『彼らの心の中の日本との距離は、真奈が想像するよりもずっと近いに違いないということだ。そのことは真奈にも驚きを伴った発見であるとともにたいへん申し訳なくも感じた』
(アリガト謝謝第一章)

彼らというのは台湾人で、真奈というのは小説の主人公です。これは、台湾で連日募金活動が行われている様子を見た小説の主人公・真奈が感じたことで、台湾人と日本人の関係について新しい発見をするという場面です。そして、これは残念ながら現状でもあると思います。

ただ、希望も入っているかもしれないけれど、わたしは今不均衡なこの関係も将来はよい方向に変わっていくだろうと思っています。

最後になるんですけど、ちょっとだけ、わたしが「アリガト謝謝」を執筆する前に現地取材をした時の話をさせていただきます。

取材は2014年の3月、震災からちょうど3年がたったころからはじめました。いろいろなところに行って、たくさんの人に話を聞きました。このとき、先方に対して、取材の前に二つのことを言いました。一つは今日取材した内容はフィクションとして扱わせてほしいということ。そして、もう一つは、本にしたいのですが、出るかどうかはわからないということ。

どういうことかという、日本では小説という

かたちで出版を考えていたんですが、小説を出版するというのは本当に難しいからです。わたしは、台湾では小説も散文集も出していますが、日本ではこうした文芸関係の作品は出したことがありません。ですから、はっきりいって全然無名です。そういう人が小説を出したいと言って、出版社の門をたたいても、出版してくれる会社を見つけるのは難しいと思ったからです。

だから、このときは「できる限りの努力はします」としかいうことはできませんでした。それで取材を申し込みました。しかし、これに対して台湾の人たちはみんなすごく快く取材に応じてくれました。これは「アリガト謝謝」の創作過程で一番うれしかたったことであり、ものすごく感謝したいところでもあります。

取材を進めていく中で、彼らは、当時のことを一つ一つと、芋づる式に思い出してくれました。このときわたしはラッキーだと思いました。というのは、取材に行ったのがもう少し遅かったら、彼らもいろいろなことを覚えていなかったかもしれないからです。話を聞くにはぎりぎりの時期だったのかもしれない。

もうひとつ、取材していて発見したことがありました。それは彼らも自分達のやったことを確実に日本の人たちに知ってもらいたいと思っているということでした。

彼らはもちろんそんなことは口に出していません。でも、取材している中ですごく感じました。こうして無事に取材を終え、そのあと執筆に入って原稿が完成。2013年3月に、これは運よくというか奇跡的に日本で本が出ました。

本の出版から1か月後の4月、わたしは台北の紀伊国屋書店で「アリガト謝謝」の新刊発表会を兼ねた講演会を行いました。そのとき、質疑応答の時間に一人の台湾人が立ち上がってこう言ったのです。「ありがとう。台湾のことを伝えてくれて」。会場が一瞬シーンと静かになりました。そして講演会が終わったあと、何人かいた

日本人スタッフの間で「あれはいい言葉だったね」と話題になりました。そして、それを聞いてわたしも少しは報われたのかなという感じがしました。

震災から間もないころ、台湾が被災地にたくさん義援金を送ったことは、日本ではほとんど報道されませんでした。でも、これは何かのかたちで伝えなければいけない。取材をしていく中で、わたし自身も強く思うようになりました。そして最後にはメディアが伝えないのなら、わたしが伝えましょう。そんな気持ちになりました。

本が出版となったあと、わたしは講演会を開いてたくさんの人たちに直接伝えたいと思いました。特に被災地での講演会を是非とも行いたいと思って、事あるごとに、いろいろな人たちにその旨をお願いしてきました。それでも、実際にはなかなか難しくずっとそのチャンスはありませんでした。そんなとき、測量調査技術協

会の齊藤専務理事が声をかけてくださいました。本当に、これはうれしかったです。この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。それとともに、今後も被災地で生活する人たちに「あのとき台湾ではこんなことがあったんだよ」と伝える機会があればいいと願っています。

ということで、これにて本日の講演「アリガト 謝辞～200億円の義援金が集まった台湾」を終了させていただきたいと思います。少し長くなりましたけれど、最後までご清聴ありがとうございました。



講演者

木下 諄一 (きのした じゅんいち)
台湾在住 小説家・エッセイスト

本稿は平成29年11月17日、当協会の「地理空間計測・活用技術セミナー2017 in 仙台」において特別講演をいただいた木下諄一先生のご講演内容をまとめたものです。